

2007 年 7 月 6 日

政策・制度要求と労働組合

連合副事務局長

逢見直人

- 1 自己紹介にかえて - 如水会会報 2005 年 11 月号
- 2 連合が取り組む政策・制度要求の前提と目的
 - (1) 連合の政策活動の前提
 - 1) 労働組合主義に基づく運動
 - 2) 市場経済を前提とするが市場原理主義には対決
 - 3) 「労働の尊厳」を大切にした働き方の追求
 - 4) 社会正義の追求
 - 5) 「雇用社会化」を踏まえた労働組合の役割の自覚
 - 6) 理念・目的が一致する政党・政治家を支援
 - (2) 労働組合が政策活動に取り組む目的
 - 1) 労働組合主義の発展
 - 2) 働く側のニーズ
 - (3) 政策・制度要求によって実現した労働界の統一
- 3 連合の政策要求の領域と視点
 - (1) 政策要求の領域
 - (2) 連合の政策・制度要求の視点
 - 1) 基本的視点
 - 2) 政策立案能力の向上と合意形成
- 4 政策・制度要求の実現手法とその成果
 - (1) 実現手法
 - 1) 政府との協議
 - 2) 政党との協議、国会対策

- 3) 審議会等への参加と意見反映
- 4) 経営者団体との定期協議
- 5) 国際機関との連携
- 6) 職域・職場における運動
- 7) 大規模キャンペーン

(2) スケジュール

(3) 主な成果

5 今日の政策課題 - 格差問題への対応

- (1) 生活と労働が破壊される格差社会
- (2) 進む働き方の二極化
- (3) グローバル化、ポスト工業社会と労働
- (4) ニュー・エコノミーの矛盾
- (5) 格差是正のための政策的枠組み
- (6) 連合が求める格差是正策

6 市場原理主義的労働政策の問題点

以上

	一生の財産 「津田ゼミ」 津田 直人 (前副社長) 「光あるうちに光の中を歩め」ゼミ誌「じんめい」創刊号で、津田直人先生は	ミ生に聞けてこの言葉を贈られた。これはオーストリアの小説の題名で、「光」とは神をさしているのだが、先生は、それとは別に「光あるうちに」すなわち希望と希望がふれているうちに、意味のある人生をしつかり歩いてほしいという意味で使われた。 私が津田直人先生のゼミナールに入門したのは一九七四年四月であった。労働問題を学びたいと考えて一橋大学に入学した。先生は当時四十八歳で、機力的に研究活動に取り組んでおられ、ゼミでは産業社会学や、テーマの「科学的経営学」などを講義された。やがて先生の研究テーマである日本経済発展に集中した題を講義するようになった。ゼミの指導は厳しかった。報告を終えて「やれやれ」と思っ	てみると、あの一言が返ってくる。「それで……」「返すにどういうことか」「それでそれはどう思うか」を繰り返した質問が「それで……」の一言であり、ゼミ生の報告に不満がある時に、この質問が返せられた。 就職にあたって、私は労働問題をライフワークとした職業を選択したいと考えていたが、具体的なイメージを描くことができなかった。卒業前年の暮れ、先生の自宅を訪ねた時に、「ある労働組合から雑誌を採用したいと言っているがどうか」というお話があり、気持ちが動いた。先生の紹介で、当時のゼミ生と知り合い、今もこの仕事を続けている。先生の一言で私の職業人生は決まったようなものだ。 ゼミは一生のつらいとい
--	--	--	---

う先生の言葉そのままに、卒業後も月一回土曜日の午後、先生の自宅で開いていた「土曜会」に参加した。「土曜会」は先生が以前勤めていた武蔵大学、中央大学の卒業生を中心に集った勉強の場であった。先生を主賓に、院生や私も加わって実施した「流通業におけるパート労働者の実態調査」は、その後、パート労働問題を研究する際の必読文献となった。研究会は夏は軽井沢の別荘で行われ、奥座敷と雑談をするのも楽しいひとときであった。 先生は毎年一月二日、ゼミ生のために自宅を開校してくださった。卒業生が次々と年輪が経ては、近況を語り、感謝するが恒例であった。奥座敷はこの日のために、暮れの二十九日から料理づくりに	没頭されていたと伺っている。 一九九〇年、突然の事故で先生は最期を遂げられた。夕食後のひととき、奥座敷の食卓を後にされていた先生に、お別れの手紙を渡した。少しも話し相手になれなかったという思いで、月二回土曜日の午後、先生を囲む読書会「読の会」を有志で開催した。「読の会」は毎回午後十時を過ぎる頃まで続いた。歴史、宗教、政治、経済、教育、経営の問題などテーマは幅広く、先生のお話はいつも興味深いものであった。 先生が病気で倒れたのは、二〇〇〇年十二月だった。話もなくなった先生から言葉が出なくなった。病院でも先生を囲んだ会は続けられ	た。先生は私たちの顔を見るとうれしそうに微笑み、体調の良い時にはちょっとした言葉が返ってくることもあった。最後にお見舞いしたのは今年七月二十三日、五十年卒のゼミ生と一緒だった。「また来ますね」と先生の手を握ったのが、最後のお別れになってしまった。 師喪が満ちて九月二日、先生は七十九年の人生を閉じられた。十五年前に奥座敷の遺骨を拾った同じ火葬場で、先生の遺骨を納めさせていただいた。思えば、卒業以来三十年間、ずっと先生から教わり続けてきた。先生の下で、読んだ書籍も相当の量になった。私にとって、津田ゼミという一生涯の財産である。そのことを誇りに思う。 (津田 直人)
--	--	--

個人住宅から大規模建築まで
ひとと未来に、やさしい空間
を創ります

附 興 建 社
〒167-0081 東京都杉並区高井戸 6-14
TEL: (03) 8392-8911 (代)
FAX: (03) 8398-3450
e-mail: yoshida1966@mercury.ne.jp

専務取締役 吉田 佑一 (附 41 社)
MCS 建築計画 企画事業・グループホーム運営

グループ会社
手塚建設 不動産事業 全社